
俺は銀河を救えるか？

神城匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は銀河を救えるか？

【Nコード】

N2734BA

【作者名】

神城匠

【あらすじ】

ありがちな異世界転生モノ。「僕たちの世界を救つてよ。英雄になつてよ」という可愛らしいネズミの誘い文句に頷いた不良少年は、とある銀河系の小さな惑星国家ヴェスパニア王国に暮らす一般市民サンジュスト家に転生した。戦乱続く銀河系、滅亡寸前のヴェスパニアで、彼は英雄となり世界を救うべく、行動を開始するのだった。この物語は、チート要素、ご都合主義、ハーレム、残虐シーンなど含みます。

第0話 世界を救ってよ（前書き）

この作品は、現代地球で暮らしている少年が異世界に転生し、英雄として活躍していく物語です。異世界とは即ち、地球が属する宇宙とは別の宇宙、別の銀河系になります。

もしも、あなただったらどうしますか。普通に暮らしていて、そこへいきなり「僕たちの世界を救ってくれ」などと言われたら。具体的な説明もなく、生命の保証もなく、ただこちらの世界に来て、自分たちを助けてほしい、英雄になってほしいと言われたら。私だったら、速攻断るような気がしますが、一方で行ってみたい気もある。でも英雄になって本当に幸せなのか。平凡な日常よりもスリルある非日常のほうが本当に楽しいのか。それを考えてみたくて、小説にしてみました。

第0話 世界を救ってよ

「ねえ、君の力を貸してよ。君の力が要るんだ。僕たちの世界を救ってこないかい？」

ある日、突然現れたマスコット人形のような可愛らしいネズミは、そんな風に言って少年の度肝を抜いた。

「別に難しいことじゃないんだ。うん、って頷いてくれれば後は僕たちが万事全て整えるからさ。僕たちを助けてよ。救ってよ」

と、ネズミは言った。

それは、家の屋根裏とか、店の片隅に巣食っている薄汚いドブネズミとは違って、透き通るようなさらさらな白い毛並み特徴的な美しいネズミだった。少しだけ大きめなハムスターといったほうが妥当だろうか。いや、それ以上に何より、どこからどう見てもネズミの範疇を超え得ない小動物が平然と人語を操っている事実。少年は驚きの表情を隠せないのだった。

とはいえ、問われた以上、答えてやるのは人としての義務とか常識なわけで……。まあ、なにか気の利いた答えを返そうと決意するより前に少年の口からは、

「は？」

そんな疑問詞が自然と飛び出していたのだが……。

「い、いや、何言っただか全くわかんね。ってかお前なに？ 何で喋ってんの？ いや、俺、夢でも見てんのかな？ 幻でも見てんのかな？ うわあ、いよいよ俺終わりだ。いろんな意味で終わった」

頭を抱え、呆然と立ち尽くす少年。

ネズミに限らず人間以外の存在が人語を操るなどというメルヘンチックな世界からは、十年近くも昔に卒業したはずの彼には、目の前の光景、現実が理解できない。というよりむしろ理解しなくなかった。

「うーん、まあ幻でも夢でもなくて現実なんだけど。……でも、面白いと思うよ。楽しいと思うよ。怖いけどスリルはあるけど、変哲のない人生を何気なく過ごすよりはよっぽど有意義だと思うよ。何しろ君は、英雄になれるんだから。世界を救う勇者様になれるんだから。だからさ、力を貸してよ。その特別な力を僕たちのために使ってよ」

ネズミは、そう言っただけで笑った。

少年は困ったような顔をして、きよるきよると辺りを見回している。

もしかすると、ドッキリ？

芸能人でも有名スポーツ選手でも政治家でもない自分にドッキリ企画を仕掛けるようなテレビ局もないだろうが、可能性としてはもはやそれしか考えられない。そうだと考えれば、喋るネズミも、やたら金のかかった玩具であると説明できる。

そうだ。ドッキリだ。

そう思い、少年は何度も何度も周りを見回すが、しかしカメラらしいものは何もない。

「ち、力ってなんだよ。特別な力って別に俺は何にも持ってない。……俺はどこからどう見ても、ただの不良以外のなにものでもねーんだよ」

本来、今は授業中。それを完全にサボって、こんなところでうるうるしている以上、優等生ではあり得ない。金色に染め上げた髪の毛を逆立て、着崩した制服に身を包み、改造したバイクを自由自在に乗り回している、絵に描いたような不良だ。

決まり切った人生と、それに対して何もできない自分という存在に嫌気がさして、社会に対して突っ張っているバカなガキ。

こんなバカに、特殊な力などあるはずもない。

そんなことは誰に言われるまでもなく分かっているのだ。それなのに、このネズミは、何を寝ぼけたことを言っているのだろうか、少年は心の底から思ったが、ネズミはどうも本気のようにだった。

「君には力があるんだよ。そうでなければ、僕は君にこんな頼みごととはしないよ」

「……そりゃそうだろうけど、具体的にどんな力が俺にあるのかって聞いてんだよ！」

少年の問いに、しかしネズミは薄笑いを浮かべるだけで答えようとはしない。

「……まあいいや。で、具体的には何をやればいいんだよ」

もしもこんな提案を普通の人間がしてきたとしたら、バカげた話と一蹴していただろう。だが、何しろ目の前にいるのは、どこからどう見てもネズミでしかありえなかった。あり得ない非現実的存在から、非現実的な話を振られたのだ。もはや一笑にふすわけにはいかない。少なくとも話を聞く価値ぐらいはあるだろうと、彼は思っ

た。

少年は考える。

元々、こちらの世界にそれほど未練があるわけではない。

くだらない日常の連続に辟易していたところが、確かに彼の心の中には存在するのだった。だからこそ、彼はアウトローを気取って、今も学校をサボって近所のコンビニで悪ぶっているのである。いっそ、ネズミの誘いに乗って、彼らの世界とやらを救ってやるのも悪くないかもしれない……などと思ってしまったのが、少年の運のつきであった。

彼が軽々しい気持ちで頷いた瞬間、

突如、辺りの時間が完全に停止してしまったようで、それまで忙しなく動き回っていたビジネスマンたちがピクリとも動かなくなつた。それなりのスピードですつ飛ばしていた自動車や電車、自転車もブレーキ一つかけた形跡もないのに、その場で完全に静止していた。

「な、なんだ、これは？」

驚く少年。

「な、なにがどうなってるんだ？」

彼は呆然と立ち尽くす。

現実と非現実の間にあつたはずの絶対的な壁が、今まさに音を立って崩れ落ちた。

そんな感じ。

「じゃ、行くよ。あ、ただね。一つ言い忘れていたけど、君を僕達の世界に招くには、その体はちょっと大き過ぎるんだよね。だからね、君には赤ん坊に戻ってもらうよ。大丈夫。成長したら自然と今

の記憶を取り戻すから」

既に異世界への移動は始まっているようで、完全に停止した世界が突如、まばゆく真っ白に輝きだした。

一方、少年は、ネズミの思わぬカミングアウトに驚きつつも、今更「嫌だ！ やめて！」とは言えないので、ただ呆然と戸惑っているだけだった。

そうこうしているうちに、時空移動は着実に進み、彼の意識は、彼方の先へと消えていった。

英雄になれ！

世界を救え！

物心がついて間もない少年の脳裏に、そんな言葉がしきりに飛び交っている。

少年は今、レオンハルト・ノエル・サンジユストと名乗っている。五〇〇年の長きに渡って戦乱が続いているただっ広い銀河系で、辺境の惑星アストレアと若干の衛星を必死に守りぬいている小国ヴェスパニア王国の最下級貴族であるサンジユスト家の嫡男として育った彼は、頭の中に飛び交うそんな不思議な言葉に悩まされている以外は極めて普通の少年でしかなかった。普通の小学校に通い、普通の中学校に通い、普通の高校に通っている。

そして、高校卒業後、彼はヴェスパニア王国宇宙軍士官学校に入学することが正式に決まっていた。まあ、別に行きたくて行くというわけではなく、主として金銭的要因で大学に行けなかったがゆえにやむなく行くに過ぎない。士官学校に入れば、相応の知識も得ら

れるし、学費は免除だし、学生寮で集団生活を送れば食費も寮費も水道光熱費も無論無料。何より給料が得られるという点が大きかった。しかも、文民による支配と、学歴至上主義が徹底しているヴェンヒリアン・コントロールスパンニアにおいて、軍人の社会的地位は極めて低く、軍人志望者も非常に少ないので、ひとたび決意してしまえば、士官学校に潜り込むことはそれほど難しい話ではなかった。

こうして何とか進路も決し、安堵していたレオンハルトのもとにある日、真っ白な毛並みを誇るネズミが唐突に姿を現し、

「さあ、準備はできたかい？ 英雄になってこの荒んだ世を救うんだよ。僕達のこの国を絶望から救うんだよ」

と、言った。

「なんのことだ？」

ヴェスパンニア王国において……というよりこの銀河系においては、人語を操る小動物などというものは決して珍しくはない。レオンハルトも、これまでに何度も人語を自在に操る動物を目にしているから、ネズミが喋ろうと、別段驚きはしなかった。

だが、ネズミが口にした言葉の内容には、驚いた……というよりはむしろ、何を言っているのか、言葉の意味が容易く理解できなかった。

「ん？ あれ、おかしいな？ まだ記憶が戻ってないの？」

ネズミは困ったように首をひねりながら考え込んでいる。

「記憶？」

レオンハルトは意味が分からぬと言わんばかりに、ぎろりとネズミを睨みつけていた。

「うーん。僕のシナリオ通りに士官学校に入ってくれたから、絶対に記憶は戻つてると思ったのに。まあいいや。経過はどうあれ僕のシナリオ通りだし。……というわけで、レオンハルト君。君には、契約通り世界を救ってもらうよ。英雄になってもらうよ」

「え、英雄？ け、契約？」

「うん。ちなみに、契約不履行の場合は、死んでもらうよ」

可愛らしい顔をして、可愛らしい声色で、随分と恐ろしいことを平然と言つてのけるネズミを前にしてレオンハルトは言葉を失つたが、しかし彼は戸惑っている。

そもそも、英雄になるとか、世界を救えとか、そんな話を聞いたこともないし、当然契約したことなどないはずである。少なくとも彼の記憶の中ではそうだった。

「うーん、記憶が戻ってないつてのは僕の計算違いだったなあ。でもまあいいよ。いずれどうせ記憶は戻るんだから、それまでは契約執行は保留にしておいてあげる。でも、一応、いつまでも記憶が戻らないのは困るから、これから僕が君を監視してあげるね。戻りそうもなさそうだったら、記憶なんてどうでもいいから契約の執行を迫ってあげるから」

全くもって、言っている言葉の内容と口調が、純真無垢で無害っぽい外見とミスマッチだった。

レオンハルトは戸惑いを隠せなかったが、それは別にミスマッチそれ自体に対してではなく、この天使のような小動物がもたらしてくれたとんでもない言葉の中身にある。契約とか、契約不履行の場合は死、などと穏やかならぬ言葉もそうだが、英雄になれとか世

界を救えとか、このネズミは正気で言っているのだろうか。まあ、確かに今の銀河は五〇〇年も飽きることなく戦争をやってきて、人々は英雄の登場を待ち望んでいるし、そもそもヴェスパニア王国自体が、東の超大国ジュピウス帝国に虎視眈々とつけ狙われていて、危急存亡の秋にある。

だが、そんな危機は、もっと偉い人が何とかしてくれるだろうし、五〇〇年も続いた戦乱が、今更何とかなるとは思えない。英雄の登場程度で何とかなるほど、銀河は狭くない。銀河は広すぎるのだ。そして人口は多すぎるのだ。戦いのない世の中など絶対にあり得ない。

「ま、今は別に君のやりたいようにやってくれればいいよ。いずれ僕が助言することになると思うけど、今の現段階では見守るだけだよ。でも、君は英雄にならないといけないし世界を救わないといけない。そのためだけに君は今ここにいるんだからね。あ、そうだ。そう言えばまだ僕、名前を名乗っていかなかったね。僕の名前は、コタローって言うんだよ」

「こ、コタロー？」

どこかで聞いた覚えのある名前だと、心のどこかで思いつつ、レオンハルトはジツと、このわけのわからぬ小動物を見つめていた。英雄になれ。世界を救え、とこいつは言う。そして、その契約が果たせない時、自分は死ぬという。なんとという無茶ぶり。なんという理不尽な話だろう。

これまでこの荒れた世界を救おうと、何人の男たちが現れては消えていったかしかない。英雄にはなれるかもしれないが、世界を救うなど無理なのだ。もしも本当にそれが可能ならば、なんで五〇〇年も銀河は戦争状態を続けていなければならなかったのだ。仮に銀河系に平和をもたらすことができるのだとしても、少なくともそれは自分じゃない。

「ま、君は英雄にはなれるよ。そういう定めのもとに生まれたんだからね。でも世界を救えるかどうかは君たちの努力次第だよ」

そんな風に言いながらコタローは軽やかな仕草でレオンハルトの足と体を伝って肩に登り、耳元でクスクスと笑っていた。

こうしてレオンハルト・ノエル・サンジュストの？英雄としての人生？は始まりを告げた。彼自身、よく分からないうちに、世界を救うというとんでもない使命（全うできなければ死）を負わされた哀れな少年は、ハアと深いため息を吐いてから、高校への道のりを急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2734ba/>

俺は銀河を救えるか？

2012年1月6日23時46分発行